ニッポン 人・脈・記

おーい 寅さん⑬

夢見たふるさと どこに

69年8月、「男はつらいよ」第1作の公開日、山田洋次(77)は家でフテ寝していた。

テレビドラマの寅さんの人気をみて映画化を提案、「失敗したら会社を辞める」と大見えをきった。でも社内試写会の評判はいまひとつ。「喜劇を作るはずが、まじめな映画になっちゃった。僕はもうだめだな、と」

その日、新宿の映画館にいたプロデューサーから「すぐ来い」と自宅に電話が入った。駆けつけると「昼間からお客さんがいっぱい。どわっと笑うわけよ。もう映画は斜陽といわれていた時代なのに」。

国民的シリーズに育つのはなぜか。心に響く名セリフぬきには語れない。渥美清の寅さんはいう。

〈ザマ見ろい、人間はね、理屈なんかじゃ動かねえんだよ〉

〈おう？ てめえ、さしずめインテリだな〉

第1作の69年は東大安田講堂攻防戦があった学生運動の年。山田もよく新宿駅で学生の演説を聞いた。「でも体から出てきた言葉じゃないのね。頭の中だけで構築された理論で世の中が変わるだろうか、人間を変えていけるんだろうか？」。そんな思いをセリフにこめた。

〈庭一面に咲いたリンドウの花、あかあかと灯りのついた茶の間、にぎやかに食事をする家族たち、それが本当の人間の生活ってもんじゃないか〉

志村喬がさくらの夫の博の父親を演じ、しみじみとつぶやく。71年の第8作「寅次郎恋歌」だ。この年、マクドナルド1号店が銀座に登場し、カップヌードルも発売された。食卓の風景ががらりと変わりはじめる。名優志村のセリフは日本人の原風景を映していた。

この第8作の撮影中、渥美は山田にいう。「八という数字は末広がりで縁起がいい。それにあやかって、寅さんもそろそろ終わりでしょうかねえ」

ところが148万人もの観客を集め、全国の映画館主が山田らへの激励会を開く。やめるにやめられなくなった。

翌72年、「日本列島改造論」の田中角栄内閣発足。町も村も自然も「改造」の波にのみこまれる。山田らは農村風景を求め歩いた。

「どうしても土の道がみつからなかった。渥美さんは『もうぜいたく言わないからさ、これ以上、この国は変わってほしくないな』って」

〈仏様は愚者を愛しておられます〉

こういったのは帝釈天の「御前様」笠智衆である。こんな懐の深い人生の先達に見守られたらいいな、と思わせた。

笠の生家も熊本の寺だった。「姿そのものが一幅の絵。撮影現場にさわやかな風が吹きすぎるようだった」と山田。高齢の笠の体調がすぐれぬときは鎌倉の笠の自宅近くの寺を借り、帝釈天にみたてて撮影した。

寅さんの名セリフいろいろ。

恋愛。〈燃えるような恋をしろ。大声だして、のたうち回るような〉〈好きな女と添いとげられれば、こんな幸せはないけどさ。しかしそうはいかないのが世の中なんだよ〉

家族。〈労働者諸君！ 田舎のご両親は元気かな。たまには手紙を書けよ〉

人生。〈あぁ生まれてきて良かったなって思うことが何べんかあるじゃない。そのために人間生きてんじゃねえのか〉〈生きてる？ そら結構だ〉

人間。〈お前とおれとは別な人間なんだぞ。早え話がだ、おれが芋食って、お前の尻からプッと屁が出るか！〉

笑いと勇気をくれた寅さんの誕生から40年。農村の衰退、バブルと格差社会、「僕たちの国はすっかり変わってしまった」と山田は語る。いま寅さんが生きていたら何というだろう。こんなセリフもあった。

〈わびしい独り旅の夜汽車の中のうたたねに、ふと夢に見るのはふるさとのこと。お笑い下さいまし〉

（このシリーズは文・小泉信一、写真・八重樫信之が担当しました。本文敬称略）

㊤晩秋の農村を旅する寅さん
＝「寅次郎の休日」から

㊨笠智衆さん
＝いずれも松竹提供

志村喬さん（左）

■人をめぐる物語をお寄せください。電子メールはjinmyaku@a